

ペットボトル以前の事

水を買う

ペットボトルはわたしたちの生活にすっかりなじみのものになってしまった。「水を買う」という事がニュースになった時代から、今やすっかり水は買うものになった。ペットボトルが普及して、大きく変わったのは水の携帯性であろう。ペットボトルが登場する以前であれば、水筒を携帯するしかなかったが、今では町のどこでも手軽にペットボトルに入った水を購入し、空き容器はどこにでも捨てられる。また飲みかけでもふたを閉めれば、カバンに入れて持ち歩く。ガラス瓶と違い軽くてゴミ箱があればどこにでも捨てられるのはペットボトル以前の飲料ではなかったことだ。

もうひとつ、ペットボトルの出現によって大きく変わったのが、ラップ飲みに対する認識であろう。テレビニュースに映るさまざまな会合や委員会を見てもペットボトルの

水やお茶で、最近のコップがない方が圧倒的だ。ペットボトルがそういう場所でも利用され始めた最初のころはガラスとペットボトルと一緒に置いてあったが、やがてガラスが紙コップになり、いつの間にか飲むための器はなくなった。

ラップ飲み

ペットボトル以前からラップ飲みはあった。しかし、ごく当たり前のことになってしまったのはペットボトルの普及によってである。瓶や缶が主流の時代でも口をつけて飲むということはあった。しかし、缶は一度開けてしまうと保存容器から飲む器に意味を変換させていた。ペットボトルではふたを閉めれば、開封後も保存容器であり続けるのだ。だからペットボトルでのラップ飲みは保存容器に口をつけて飲むラップ飲

みになってしまふ。

水を携帯するための保存容器は、以前は水筒が一般的だった。しかし、水筒には必ずコップが付いていた。駅弁と一緒に売られていたお茶のプラスチック容器もふたが茶碗になるようになっていた。ペットボトルが一般化してラップ飲



現在でもJR東海道線米原駅で販売されている、ふたが茶碗になる駅弁茶ポリ容器



ガラスびんをゴザで包んだ水筒。コロンビア

にはラップ飲みも風情があるが、部屋のなかでソファに座りながらラップ飲みは、「未だ」なじまない。

モノが支配

柳田国男は「木綿以前の事」で、日本人が木綿を手に入れた後、それ

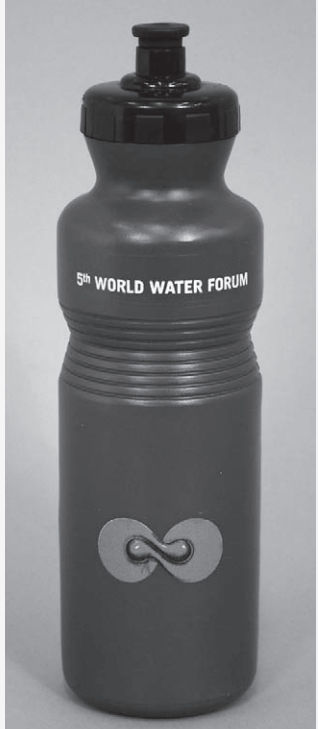
までの麻の服を着ていた時代からさまざまな生活の有り様や感覚が変わってきた事を論じたが、そのなかで「人間世界では、進歩の途が常に善に向かっていくものと安心してはいられぬ」として「モノ」が人間の生活や感覚に与える影響について論じているが、ペットボトルも利点は

かりで喜んでいられない。中高生の部活動内での新型インフルエンザ感染の原因のひとつにペットボトル飲料の回し飲みがあげられていた。単なるマナーではなく衛生上の理由で先人はラップ飲みを戒めていたのだろう。一度、口をつけたペットボトルのなかではさまざまな

細菌が繁殖を続けているという。わたしが中学生のころ、部活動が終わった後で瓶のジュースを買い、みんなで回し飲みをするとき、口をつけずに飲んでいて、口をつけずに高いところから大きく開けた口のなかにジュースを注ぎ込むのだ。ラップ飲みよりも下品で豪快な感じだが、今普通になってしまったラップ飲みよりも衛生面では気遣っていたといえるかもしれない。

人がモノを生み出しているのだが、しかしそのモノによって人は変化させられている。それを「自己家畜化」とよぶ人もいる。人間が生み出したモノは人を支配している。モノだけでなく物語（モノ）語りも人を支配しているのだが、このふたつの「モノ」と人との関係を見ることが民俗学だ。

モノや道具は使い方次第だと人はいう。いわゆる電子ゲームの是非が議論されるとき必ず出てくるのが、ゲームは道具だから使う人次第で、時間を決めてやれば問題はない、という意見だが、モノがもっている人間を支配する力を軽んじているように思う。わたしたちはモノである道具を使いこなしているつもりであるが、結局は道具に支配されているのである。



「世界水フォーラム」で配布されたもの。イスタンブールトルコ



吹田市水道部が作った高度浄水処理水「いずみの水」ボトル



ガラスびん入りボトル水「会津心水」



リラの僧院の聖水入りボトル。ブルガリア

こじま まぶみ
小島摩文

鹿児島純心女子大学 准教授

専門は民俗学、民具研究。最近モノと物語について考えている。博物館展示はまさにモノが物語に収まっている姿。